

# 老いて さまざまよう 閉鎖病棟から

1面からつづく

福井記念病院（神奈川県三浦市）の閉鎖病棟に入院するチャコさん（83）に頼まれ、記者は面会が途絶えていた長男を捜した。5月下旬、病院から電車とバスで1時間ほどの住宅街で、長男夫婦と暮らしていた一戸建てを見つけた。長男は57歳の会社員。母からの手紙を受け取る「会いに行きたいのですが……」と戸惑った顔をされた。

8年前に父親を亡くし、その翌年、母親のチャコさんが認知症を発症する。入院までの5年間、夫婦で介護を続けたが、コンロに火をつけて忘れることを繰り返した。被害妄想も強くなり「家族にいじめられた」と親戚や警察に昼夜を問わず電話した。激しい症状の標的になった妻は体調を崩し、自身も糖尿病の治療で毎週末、遠方の病院に通っている。

半年ほど前に申し込んだ特別養護老人ホームは

100人待ち。妻はまだ心の傷が癒えないものの、義母のために新しい服や下着を買いたいそうえた。だが、病院に足が向かないまま半年が過ぎた。

長男に手紙を届けたと伝えると、チャコさんは「元気にしてたの？ 本当に良かった」と目を潤ませた。面会が途切れても長男を悪く言うのを聞いたことがない。福島から上京して24歳で結婚し、保険外交員として2男を育て上げた。「あの家はね、私の退職金も出して建てたのよ。家族に尽くした誇りがにじむ。

6月のある日、夕食を終えると車いすを手でこぎ始めた。数分ずつしか進めず、何とか自分の病室にたどり着くと繰り返して声を上げた。「すみません。トイレお願いします」。だが、服薬などで忙しい職員には届かない。日中は50人ほどの患者を約15人が自配りするが、夕食後の夜勤は3人しかいない。ようやく気づいた職員は「今忙しい

## 傷ぬえ癒えぬ家族も残る



ホールとナース室から最も近い自分の病室で、トイレの準備をしてもらうチャコさん（左）。「ここの男の人たちはみんな優しい」＝神奈川県三浦市で、手塚耕一郎撮影

### 理事長「院内、世間からずれ」

から。オムツしてあるから大丈夫」と言う。チャコさんはあきらめ、黙り込んだ。

ナース室から最も近いチャコさんら女性4人の病室は、ポータブルトイレでの排せつとオムツ交換の場にも使われる。消灯時間の午後9時まで車いすの女性が次々と運ばれて来た。病室や廊下には就寝後も便臭が漂った。

「精神科病院の日常は世間から見るとずれていて、

ることがある」。運営法人の内藤圭一理事長は言う。密着取材に応じたのは「全てさらけ出して精神医療を問い直したい」という思いからだ。

病棟の朝は早い。職員3人で患者のオムツ交換を済ませて体調をチェックするのにかかる時間がかかるためだ。午前4時50分、ホールや病室の蛍光灯が一斉にともる。職員がチャコさんの部屋から起床を促し始めた。

「もう起きるんですか」「そうなのよ」。下着を

### 認知症入院 15年で倍増

厚生労働省によると、認知症による精神科病院への入院者は1996年の約2万8000人から2011年には約5万3000人と2倍近くに増えた。入院者の半数は1年以上の長期に及ぶ。

一方、従来、多数を占める統合失調症の入院者は11年に約17万2000人で、薬物療法の進歩や高齢入院者の死亡により96年から約4万3000人減った。ある精神科医は「入院者の減少は病院にとって死活問題。空きベッドを埋めるため認知症患者を入院させている病院もある」と指摘する。

そもそも国内の精神科病院は約34万の病床を持ち、人口比ではフランス

の3倍、米国の9倍と世界で突出している。認知症患者の激しい症状に対応できない介護施設は多く、患者の家族が「最後のとりで」として精神科病院に頼る側面もあるが、長期入院で患者の生活能力が著しく衰えるリスクも高い。このため厚労省は昨年6月、「病院から地域へ」との考えを基本とする新たな施策方針を打ち出した。

ご意見、情報をお寄せください。メール (tokuhou@mainichi.co.jp) □ファクス (03・3212・2813) □〒100-8051 (住所不要) 毎日新聞特別報道グループ